

Vol.20

テクノロジーと法の未来へ

FACULTY OF
GLOBAL INFORMATICS

国際社会が抱える問題を「情報の仕組み」と「情報の法学」の視点で
分析・解明し、解決策を論理的に構築する、iTL独自の学びに迫ります。

未来を拓いたシリコンバレー留学

国際情報学部国際情報学科3年 / 私立中央大学杉並高等学校（東京都）出身

気谷 聖子
（きたに せいこ）

2023年、コロナ禍を乗り越え学部初の現地開催型となった「国際ICTインターナシッブ」。私はその参加者の一人として、2週間のアメリカ留学を体験してきました。そこで得た身に余るほどの有意義な経験、充実した思い出を、ほんの一部ですがお伝えできればと思います。

専門性の高い英語能力のために

「国際ICTインターナシッブ」は、現地渡航前に日本国内のいわゆる「GAF A」と呼ばれるビッグ・テックの支社訪問やVRでのスピーキングレッスンなどを1学期の期間を費やして行った後、カリフォルニア州立大学イーストベイ校での学修、シリコンバレーに拠点を置くIT企業の本社訪問を主軸としたプログラムです。私はSNSにおける人々のコミュニケーションとコンピューターエンジニアリングに興味があり、所属するゼミではその分野に関する研究を進めています。そこで気付いたのが、変化が早く広範なインターネット社会やテック業界の最新動向を追うには、世の中をグローバルに捉える視点と高い英語力が必要不可欠だと

いうことです。シリコンバレーでITの最前線に触れることで、より幅広い価値観を身につけたい、専門性の高い英語を実践的な能力として習得したいという思いから本プログラムに参加しました。

コロナ禍が災いし、私には留学経験どころかネイティブスピーカーとまともに交流した経験すらありませんでした。リスニング力向上のために始めた洋画鑑賞も字幕なしではまったく聞き取れず。しかし、プログラムの応募時に要件として求められていたのは、セッションにおいて積極的に質問をすることでした。ホストファミリーと2週間を過ごし、企業訪問をはじめとする現地での経験を有意義なものとする事ができるのか、出発前までは不安が募っていくばかりでした。

現地での体験

いざ現地に到着してみると予想通りまったく英語が聞き取れず、常にネイティブのナチュラルな英語に圧倒され、飲食店での注文時に手が震えてしまうほどでした。2週間、何の意思疎通もできないまま貴重な経験を不意にしてしまうので

はないか。そんなプレッシャーに押しつぶされそうになりながらも、寝る間を惜しんで翌日のセッションに関する資料を読み込み、ホストファミリーともお互いの国の慣習についてさまざまな会話をしました。完全に理解はできなくても「何か質問できることはないか」と常に考え、訪問先の企業の方ともなるべく対話をするように心掛けていました。すると、英語力が向上したのはもちろん、常に思索を広げながら物おしせず能動的に対話することができるようになり、もはや別人のようになった自分に気が付きました。

そんな中でも特に印象深かったのが、MicrosoftでのAIに関するセッションと、最新技術を用いたプロダクトデモです。訪問企業の一つであるシリコンバレーに位置するMicrosoftのシリコンバレーキャンパスでは、現在話題になっている対話型検索エンジンChatGPTの将来の利活用や展望についてのセッションにはじまり、アメリカならではの広大な社屋を回りながら、数々の最新技術に触れる体験をさせていただきました。サンフランシスコの地形を忠実に再現したワライトシミュレーターやAIがゴールを守る

KITANI
SEIKO



1 マイクロソフト本社での XR 体験の様子 2 現地留学前に訪問した日本 Google 3 留学最終日には先生方から修了証書も
4 週末にはホストファミリーと観光もしました 5 アメリカならではのカラフルなアイスクリーム

エアホッケーなど、数々の魅力的なブースの中で、私は「Hololens」というゴーグルを装着して現実世界に仮想映像を投影するMR技術に触れました。細部まで忠実に再現された人体模型を自由に移動、回転、透過させることができるだけでなく、映像表現として実際の血液の流れなども子細に観察できるため、医療に携わる人々の理解がより深まることが期待されるそうです。医療、教育とテックの結び付きを身をもって体感し、あらゆる分野においてテックが秘めている可能性を改めて認識させられました。

得られた成長と今後の展望

今回のプログラム参加に際し、英語力や海外の文化理解といった留学の典型的側面だけでなく、不安な状況に努力で打ち勝つ経験、テクノロジーとほかの分野の結び付きとその先のワクワクするような未来展望など、何物にも変え難い数々の知見と圧倒的な成長を得ることができました。そして、自分の中の最大の変化は、「アメリカの大学院に進学したい」と考えるようになったことです。日本でただパソコンの前でコーディングをしているだけでは見ることのできなかつた世界に触れ、テクノロジーのもたらす未来への希望にますます惹かれました。その中心地アメリカで、驚きとワクワクに満

ちた日々を送りたいと帰国後数カ月が経った今でも強く感じています。たったの2週間という短い期間で、プログラムとしての企業訪問や聴講などの貴重な体験はもちろん、本当の家族のようにもてなしてくれたホストファミリー、今でも連絡を取り合っている現地の友人、そし

て情報や法律、公共政策など分野は違えて、それぞれの夢に向かってひたむきに努力しているiTLの学生たちと過ごしたすべての瞬間が掛け替えのない思い出です。今回の体験で芽生えた大きな希望を忘れることなく努力を続け、アメリカの地で再びあの大きな空を眺めたいです。